

⑤ 2年生の実践記録

「うごくうごく わたしのおもちゃ」

ア. 本年度の取り組み

「身近な材料でのおもちゃづくり」を材とした。単元を通して、教師と児童の対話を中心にし、対話から児童の気づきを深めることができるようにした。

○場・時間の設定

児童が自分の考えたことをすぐに行動に移せるように、教室より広い図工室にした。また、真ん中を広く取り、左右には材料を置き、場を設定した。

試す時間と改良する時間を1時間の中で区切らないようにすることで児童が自分でやりたい活動に主体的に取り組めるようにした。



○グループ分け

本単元では、「友だちとの対話」でも考えを深めさせるために、同じおもちゃを作っている児童同士でグループを組み、うまくいかないときには声を掛け合えるようにした。



○板書

活動中に、子供たちがつぶやいた気づきを吹き出しに書き、児童が活動している机の上に置いておくようにした。振り返りの時間にそれを見ながら発表し、黒板に吹き出しを貼ることで、板書を児童の言葉で表すようにした。

吹き出しの色はそれぞれのおもちゃごとに換え、どのおもちゃがどんな工夫をしたのかを見られるようにした。

初めは教師が子どもたちのつぶやきや会話を聞き取って板書していたが、試しに吹き出しとペンを机に置いてみたところ、自分たちで書くようになった。



イ. 実践しての成果 (○) と課題 (●)

【児童】

- 生活科の学習を楽しみにしている児童が増え、主体的に取り組もうとするようになった。
- 児童と対話することで子供たちの気づきを広め、どうすればもっと面白いおもちゃになるか深く考えさせる事ができた。
- 場の設定を工夫したことで、児童が自分で活動を決めることができた。
- 次時にやりたいことや取り組むべきことを児童自身で考え、クラス全体で共有しながら進めること

ができるようになった。

- 楽しいだけで、課題まで考えることができない児童もいたので、もっと一人ひとりに課題をもたせるようにすることが必要だった。
- 新しいことへの気付きが弱く、自分なりに工夫できない児童もいたため、記録をとるなどして変化を実感できるようにする必要がある。

【教師】

- 児童のつぶやきを拾い、メガフォンのように広めることの大切さに気付くことができた。
- 座席表を作成することで、教師が児童の様子をふり返ることで児童理解が深まり、今後の方向性を考えることができるようになった。
- 自分と違うおもちゃの工夫を交流することでのメリットが少なかった。
佐野先生には、それぞれで出てきた工夫の共通点からさらに深掘りできると良いとのご指導をいただいた。
（児「重い方がまっすぐすすむ」「重い方がよく飛ぶ」
教「重ければ重いほどいいんだね！」
児「重いと落ちてしまう。」「ほどほどの重さが大切」）
- 他教科とのバランスを考えて進めることのが大変だった。

ウ．来年度に向けて

- ・ロイロノートなどを活用して記録を取りながら進めていけるようにしたい。
- ・一人一人のゴールをイメージしながら、取り組めるように声掛けをしていく必要がある。
- ・板書をする時には、気づきなどわかりやすくなるように、もっとマークなどを活用していく。